

アウグスティヌスにおけるカリタスとしての愛の意義

The Significance of Love as *Caritas* in Augustine小原 琢¹⁾

Taku OHARA

要旨

本稿はアウグスティヌスにおけるカリタスとしての愛の意義について詳論する。ニーグレン・アンダースによれば、キリスト教の愛はアガペであるが、ギリシア哲学の愛はエロスである。エロスのな要素を持たない純粋なアガペはキリスト教本来の愛である。それゆえ彼はアウグスティヌスのカリタス論がエロスとアガペの混合であると主張しただけでなく、それを批判した。そこでアウグスティヌスの主張を検討し、次の結論を得た。アウグスティヌスによれば、人間の意志が神のアガペを受け容れるとき、カリタスとしての愛が成立する。それゆえカリタスはエロスとアガペの混合ではなく、むしろアガペの完成である。このカリタスは人間を真の幸福へと導き、真の共同体を作る。

This study discusses the significance of Love as *caritas* (i. e., charity) in Augustine. According to Anders Nygren, Christian love is *agape*, while the love in Greek philosophy is *eros*, however pure *agape*, which does not include the *eros* elements, is the original Christian love. Therefore, he not only claimed that Augustine's theory of *caritas* is a mixture of *agape* and *eros*, but also criticized it. Conclusion from the research on Augustin's theory shows that, according to Augustine, love as *caritas* comes into existence when Man's will accepts God's *agape*. Therefore, *caritas* is not a mixture of *agape* and *eros*, rather it is the completion of *agape*. This *caritas* leads Man to true happiness, and creates a true community.

キーワード：エロス (Eros)

アガペ (Agape)

カリタス (Caritas)

人間の意志 (Man's Will)

1) 天使大学 看護栄養学部 教養教育科

(2017年10月2日受稿、2018年3月16日審査終了受理)

序：問題提起¹⁾

我々は日常生活の中で多くの愛を体験する。たとえば親子の愛、兄弟の愛、夫婦の愛、師弟の愛などである。このような愛の体験によって我々は愛の意味を知ってゆく。しかし愛とは何かと問われると、どのように答えたらよいか戸惑ってしまうのではなからうか。誰もが知っていながら、誰もが答えることのできないもの、それが愛の意味である。

ところで西洋には「愛」と訳される言葉が多い。たとえばリドル・スコット『希英辞典』には「エロス」(ἔρως)²⁾、「アガペ」(ἀγάπη)³⁾、ルイス・ショート『羅英辞典』には「カリタス」(caritas)⁴⁾が見出される⁵⁾。ラテン語が公用語であった時代に、アウグスティヌスはキリスト教が愛の宗教であると説き、その愛は「カリタス」⁶⁾であると主張した。

ではアウグスティヌスが主張するカリタスという愛は、どのような愛のことを意味しているのだろうか。本稿において我々はエロスとアガペという二つの愛を手がかりに、アウグスティヌスが主張するカリタスとしての愛の意義について探究してゆこう。⁷⁾⁸⁾

I：エロスとアガペ

アウグスティヌスが主張する愛はカリタスである。このカリタスの愛について考察する前に、あらかじめエロスの愛とアガペの愛について逐次みておこう⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾。

i) プラトンのエロス論

エロスとしての愛は、古代ギリシアの哲学者プラトンが『饗宴』の中で詳論している。プラトンによれば、ある特定の対象のうちに「価値」が在り、その価値を求めて「愛する」とき、「エロス」の愛が生じてくる。この意味で、エロスは価値欲

求的な愛である。¹²⁾

このようなエロスの愛は我々にとって分かりやすい。エロスは我々が日常的に経験している愛だからである。たとえば空腹な人がカレーライスを見たとき、エロスの愛が生じる（善くも悪くもないエロス：宇宙的なエロス）。また誠実な人が異性の肉体美に溺れて墮落するとき、エロスの愛が生じる（悪いエロス：肉体的なエロティック・ラブ）。

ところでエロスとしての愛が常に悪いとはかぎらない。善い場合もある。たとえば病院で働く看護師に憧れた高校生が自分も看護師になろうと情熱を傾けるとき、エロスの愛が生じる。また危険な戦地に赴く軍人が永遠の愛を誓って妻に別れを告げるとき、エロスの愛が生じる（善いエロス：精神的なプラトニック・ラブ）。

それゆえ元来エロスは善くも悪くもないが、対象の善悪によって善悪の区別が生じてくる。じっさい悪い対象（＝物質：可変的・時間的なもの）を愛するエロスは悪いエロスになり、善い対象（＝イデア：恒常的・永遠的なもの）を愛するエロスは善いエロスになる。しかし善いエロスも悪いエロスも価値欲求的な愛であるという点で共通する。¹³⁾

このようなプラトンのエロス論は、プラトン以前に成立していた神話的世界観（＝天上の世界と地上の世界から成る二元論的世界観）に基づく。プラトンは神話的世界観を継承しながら、エロス論を展開している。¹⁴⁾

ii) ニグレンのアガペ論

アガペとしての愛は、プロテスタント神学者ニグレンが『アガペとエロス』の中で詳論している。ニグレンによれば、ある対象を「愛する」ことによって、その対象のうちに新しい「価値」が産み出されてくる。これが「アガペ」の愛である。この意味で、アガペは価値創造的な愛である。¹⁵⁾

アガペとしての愛は我々にとって分かりにくい。なぜなら本来アガペは人間の愛ではなく、神の愛だからである。キリスト教によれば、神は愛その

ものであり、万物は神から愛されることによって存在する。神から愛されることがなければ、万物は一瞬たりとも存在しない。かけがえのない一人ひとりの生命も神の愛によって産み出され保たれている。

ニグレンによれば、神の愛としてのアガペは神の子イエスの言葉と行いに示されている。それゆえ我々はアガペの愛をイエスの言葉と行いを通して知ることができる。たとえばイエスは弟子たちに向って「天の父は悪人の上にも善人の上にも太陽を昇らせ、正しい者の上にも正しくない者の上にも雨を降らせてくださる」¹⁶⁾とっている。

この聖書の箇所からも知られるように、神の愛としてのアガペは対象の価値に全く左右されることなく、万物の上に平等に降り注がれる。アガペは対象が善い場合においてのみ成り立つ条件付きの愛ではなく、対象が善くても悪くても成り立つ無条件の愛である。このようなアガペの特徴は価値創造的なキリスト教の神の本質に由来する。¹⁷⁾

このようなニグレンのアガペ論は、聖書に示されているキリスト教的世界観（＝神が愛によって万物を創造したという創造論的世界観）に基づく。ニグレンはキリスト教的世界観を継承しながら、アガペ論を展開している。

Ⅱ：カリタスの意味（1） —ニグレンの場合—

アウグスティヌスが主張する愛はエロスでもなく、アガペでもなく、カリタスである。以下、カリタスの独自性について考察しよう。さしあたりニグレンのアガペ論において、カリタスの愛がどのような評価を受けているかを確認しよう¹⁸⁾。

i) キリスト教のヘレニズム化

ニグレンにおけるカリタスの意味を理解するためには、当時みとめられていたキリスト教の歴史観について知らなければならぬ。ニグレンの一

世代前にハルナックというプロテスタント神学者がいた。彼は教理史の研究を推し進めて「キリスト教の教理（ドグマ）はキリスト教のヘレニズム化の所産である」という結論に到達した。

ハルナックによれば、原始キリスト教がヘレニズムの世界に誕生したとき、原始キリスト教はヘレニズム的な要素を全く含んでいなかった。しかしヘレニズムの世界で拡大発展するにつれて、ヘレニズムの宗教や哲学・習慣・制度などといった異教的な不純物を混入し、その純粋性を次第に失っていった。そして遂に、ヘレニズム的な要素を含んだキリスト教が本来のキリスト教であると誤解されるに至った。これが「キリスト教のヘレニズム化」である。このキリスト教のヘレニズム化のなかで、カトリック教会が今も保有する数多くの「教理」が生み出されていった。¹⁹⁾

ハルナックによれば、このようなキリスト教の歴史に終止符を打ったのは宗教改革者ルターである。ルターによって、キリスト教はヘレニズム化の所産である教理から解放されるとともに、「聖書のみ、信仰のみ」といった原始キリスト教本来の精神に立ち帰り、その純粋性を回復した。²⁰⁾

ii) エロスとアガペの混合としてのカリタス

ニグレンはハルナックが主張したキリスト教の歴史観を愛の思想史に適用した²¹⁾。ニグレンによれば、キリスト教の愛はアガペであり、ギリシア哲学の愛はエロスである。エロスの要素を全く含まない純粋なアガペこそはキリスト教本来の愛である²²⁾。

原始キリスト教がヘレニズムの世界に誕生したとき、アガペはエロスの要素を全く含まない純粋性を保っていた。しかしキリスト教がヘレニズムの世界で拡大発展するにつれて、アガペはエロスという異教的な愛によって泥臭く汚染されていった。そして遂に、キリスト教のなかにエロスの要素を含む不純な愛が登場し、それがキリスト教本来の愛であると誤解されるに至った。この不

純な愛が「カリタス」である。²³⁾

ニグレンによれば、カリタスはアガペとエロスという本来全く相容れない二つの愛の混合形態である。このような奇妙な愛を確立したのは西方教会の教父アウグスティヌスであり、愛の思想史は彼の影響によって著しく歪められた。²⁴⁾

ニグレンによれば、アウグスティヌスによって歪められた愛の思想史に終止符を打ったのは宗教改革者ルターである。ルターによって、キリスト教の愛は異教的なエロスの汚染から完全に洗い清められるとともに、原始キリスト教が保っていたアガペの精神に立ち帰り、その純粋性を回復した。かくてニグレンのアガペ論においてカリタスは非キリスト教的な愛として否定的に評価されている。²⁵⁾

Ⅲ：カリタスの意味（2） —アウグスティヌスの場合—

ニグレンはカリタスがエロスの要素を含んだ不純な愛であるとする。しかしこの主張はアウグスティヌスの考え方を正しく捉えているのであろうか。以下、アウグスティヌスが主張するカリタスの意味について考察しよう。²⁶⁾

i) アガペの完成としてのカリタス²⁷⁾

アウグスティヌスは青年時代を回想して「私を喜ばせたのは愛し愛される、ただそれだけでした」²⁸⁾と述べている。この短い言葉は愛の本質を鋭く表現している。本当の愛は喜びを伴う。では喜びを伴う愛とは、どのような愛のことを意味するのであろうか。

アウグスティヌスは自分が相手を受愛するだけでも喜ばなかった。また相手から自分が愛されるだけでも喜ばなかった。彼は自分が相手を受愛し、相手から自分が愛されたとき、すなわち「愛し愛される」という関係を築いたとき喜んだ。それゆえ喜びを伴う愛とは自分と相手との間で「愛し愛される」という関係が成立している愛のことを意味

する。

ところで「愛し愛される」という関係は単に人間と人間との間だけでなく、最も優れた意味で神と人間との間においても成立する。アウグスティヌスによれば、万物の創造主である神が人間を受愛し、その愛に応じて被造物である人間が神を受愛するとき、神と人間との間に「愛し愛される」という愛の交流が生じる。この愛を「カリタス」と呼ぶ。^{29) 30)}

アウグスティヌスによれば、カリタスが成立するのは人間の意志が神の恩恵を受け容れて感謝するときである。人間の意志が神の恩恵を拒絶するときはカリタスが成立しない。それゆえカリタスを成立させる重要な契機は人間の意志の応答である。かくてカリタスが成立するためには神の恩恵だけでなく、神の恩恵を受け容れる人間の意志の応答をも必要とする。もっともこの人間の意志の応答は人間の力ではなく、神の恩恵に基づく³¹⁾。

ニグレンが主張した神の愛としてのアガペは、すべての人間に等しく注がれる無条件の愛である。アウグスティヌスによれば、このアガペが人間のうちに救いと喜びを産み出すためには、人間の意志が神に背を向けた状態から神に心を向ける状態へと方向転換しなければならない。この意志の方向転換を「回心」という³²⁾。アガペは人間の意志が回心したときにカリタスとなって完成し、人間のうちに救いと喜びを産む³³⁾。かくてアウグスティヌスにおいてカリタスは、アガペが完成した愛として肯定的に評価されている。

ii) 神の恩恵と人間の功德³⁴⁾

神から注がれるアガペは人間のうちに救いと喜びを産み出しながら、人間の成長を促す神の「呼びかけ」として理解することもできる。呼びかけの具体的な内容は万人に共通ではなく、各人の年齢や体力・知力・才能（タレント）などの個別性に依りて異なる。

このような神の呼びかけを拒むことは「悪い行

為」である。これを「罪」と呼ぶ。罪とは人間の意志が神の呼びかけを拒む行為であり、当然その行為は悪い。これに対し、神の呼びかけに応えることは「善い行為」である。これを「功德」（＝功績的行為）と呼ぶ。功德とは人間の意志が神の呼びかけに応える行為であり、当然その行為は善い。

ところで人間の功德を次のように考えることもできる。——人間の意志は自由であるから、神の呼びかけを拒むこともできるし、神の呼びかけに応えることもできる。いいかえるならば、人間の意志は悪い行為の原因にもなるし、善い行為の原因にもなる。それゆえ功德とは人間の意志が原因となって生じる善い行為のことを意味する。³⁵⁾

このような考え方は人間の功德を日常的な道德生活の次元からみれば、おそらく正しいと思われる。しかしアウグスティヌスはカリタス的な深い次元から人間の功德を考える。たしかに「人間の意志は悪い行為の原因である」が、これを善い行為のほうにも適用して「人間の意志は善い行為の原因である」とは決して言わない。それは何故か。

無から造られた人間は滅びに向うような悪への傾きを常に持つ。したがって人間は自分の力だけで善へと傾くことができない。どんなに些細な行為であっても、神の助けなしに善い行為は生じない。善い行為の原因は人間の意志ではなく、神の恩恵である。それゆえアウグスティヌスは「人間の意志は善い行為の原因である」とは言わないのである。³⁶⁾

アウグスティヌスによれば、功德は人間の意志が原因となって生じる善い行為ではなく、神の呼びかけが原因となって生じる善い行為である。神の恩恵は善い行為の原因であり、人間の功德に先立つ。神の恩恵こそは人間の功德が成立するための絶対的な前提条件である。このかぎりにおいてアウグスティヌスは絶対恩寵主義の立場に立つ。

ところで神の小さな呼びかけを何度も拒んで悪い行為（＝罪）を重ねると、神の呼びかけを拒みやすくなる「悪い習性」が次第に形成されてゆく。

この悪い習性を「悪徳」と呼ぶ。悪い行為を重ねて悪徳が増すと、悪徳に基いて為される罪も巨大化し、悪魔的な所業になる。悪魔的な所業を為す人間は地獄の暗闇へと転げ落ちてゆく。³⁷⁾

しかしこれとは逆に、神の小さな呼びかけに何度も応えて善い行為（＝功德）を重ねると、神の呼びかけに応じやすくなる「善い習性」が次第に形成されてゆく。この善い習性を「美德」と呼ぶ。善い行為を重ねて美德が増すと、美德に基いて為される功德も神聖化し、天使的な善行になる。天使的な善行を為す人間は天国の階段を静かに昇ってゆく。³⁸⁾

かくて神と人間との間で成立するカリタスは、神の呼びかけと人間の功德との相互作用によって次第に成長してゆく。このようなカリタスの成長によって、神の似姿として造られた人間は神の似姿としての性格を強めるとともに、万物の創造主である神との絆を深め、天使的な善行を重ねながら永遠の生命を受ける者へと純化され高められてゆく。

iii) 神の恩恵と教会の秘跡

アウグスティヌスは生涯に渡って悪の問題と対決し、その答えを探し求めた。このような悪戦苦闘の日々を通してアウグスティヌスは神の恩恵についての理解を深めるとともに、教会の秘跡についての理解をも深めていった。

アウグスティヌスによれば、秘跡は神の恩恵を目に見える形で表した聖なる「しるし」である³⁹⁾。——神の恩恵は目や耳などの感覚によって確かめることができない。そこで教会は目や耳などの感覚によって確かめることができるように、神の恩恵を具体的な形で表した。それが秘跡である。このようなアウグスティヌスの秘跡論は後世に多大な影響を与えた。現代のカトリック教会は彼の秘跡論を発展させて秘跡を三つの種類に区分する。

第一はイエス・キリストである。聖母マリアを通して神から遣わされたイエス・キリストは神の

恩恵そのものである。歴史上の人物であるイエス・キリストは目に見えない神の恩恵を目に見える形で表した最も根原的な秘跡であり、源泉秘跡といわれる。⁴⁰⁾

第二は教会の存在である。全世界に広がる教会はイエス・キリストの復活を信じる人々の共同体である。死者のうちから復活したイエス・キリストの働きは教会を通して続く。教会はイエス・キリストの働きを伝えて実現する秘跡であり、基礎的秘跡といわれる。⁴¹⁾

第三は教会の個別的な秘跡である。イエス・キリストの働きを実現するために、教会は個別的な秘跡を公認している。個別的な秘跡を教会で受けた人間は復活したイエス・キリストの働きによって、目に見えない神の恩恵を確実に受けることができる。

ところで個別的な秘跡は七つある。それは、①洗礼の秘跡（教会に入信するときに受ける）、②堅信の秘跡（教会の教えを学んだ後に受ける）、③聖体の秘跡（イエス・キリストが形見として残した聖体を拝領するときに受ける）、④赦しの秘跡（自分が犯した罪を懺悔するときに受ける）、⑤婚姻の秘跡（結婚するときに受ける）、⑥叙階の秘跡（司祭になるときに受ける）、⑦病者の塗油（重病のときや、この世を去る直前に受ける）、である。⁴²⁾

アウグスティヌスによれば、教会の司祭はイエス・キリストの代理者として個別的な秘跡を執行する。それゆえ「清貧」「貞潔」「従順」の誓願を平気で破る極悪非道で破廉恥な司祭から受けた秘跡も有効である。秘跡の真の執行者は教会の司祭ではなく、イエス・キリストだからである。秘跡の効果は司祭の人相や人柄などとは全く関係がない。⁴³⁾

たしかに秘跡を受けた人間には必ず救いと喜びが与えられる。しかし救いと喜びは秘跡を受けていない人間にも与えられる。神の愛としてのアガペは万人の上に等しく注がれる無条件の愛だからである。神の呼びかけに答えようとする人間には

キリスト教の信者であるとかキリスト教の信者でないとかに関わりなく、必ず救いと喜びが与えられる。

イエス・キリストが弟子たちを集めて行った最後の晩餐のとき、聖体の秘跡が制定された。ミサは聖体の秘跡を受けるための祭儀である。キリスト教の信者はパンとブドウ酒を拝領して神の恩恵を受ける。しかしキリスト教の信者でない人々も神に心を向けるならば、これと同じ神の恩恵を受ける。ミサは神の呼びかけに答えようとする人々の絆を深めながら、カリタスによって固く結ばれた愛の共同体を形成する。

IV：カリタスの意味（3） —ニグレンに対する批判的考察—

既述（I）のように、ハルナックの歴史観を継承したニグレンはカリタスを非キリスト教的な愛であると考えた。なぜニグレンはカリタスの愛を否定的に評価したのか。以下、前章（III）でみたアウグスティヌスの立場から、その理由を批判的に考察してみよう⁴⁴⁾。

i) 恩恵の多義性

アウグスティヌスによれば、カリタスは次の過程を経て成立する。まず神が人間を愛する。これは神が人間に与える呼びかけの恩恵である。次に人間が神を愛する。これは神の呼びかけによって引き起こされた人間の意志の応答である。最後に神が人間に救いと喜びを与える。これは人間の意志の応答に応じて神が人間に与える救いの恩恵である。

このカリタスの成立過程をみると、神の恩恵が二つあることに気付く。一つは「呼びかけの恩恵」であり、もう一つは「救いの恩恵」である。呼びかけの恩恵は人間の意志の応答とは無関係に与えられるから、人間の意志の応答を前提しない。これに対し、救いの恩恵は人間の意志の応答があっ

た場合に与えられるから、人間の意志の応答を前提する。それゆえこの二つの恩恵は決して混同されてはならない。

しかしこの二つの恩恵は、あたかも「橋」と「箸」が同音異義語として全く異なるように、同音異義語として全く異なるというわけでもない。なぜなら二つの恩恵は神の善意や好意によって人間に与えられるという点で共通するからである。神の恩恵は神の意志に基づく。それゆえ呼びかけの恩恵にせよ、救いの恩恵にせよ、神の意志が人間に恩恵を与えたいと欲しなれば、いかなる恩恵をも人間は受けることができない。

とはいえ、この二つの恩恵は、あたかも「落馬する」と「馬から落ちる」が異音同義語として全く同じであるように、異音同義語として全く同じというわけでもない。なぜならこの二つの恩恵は人間の意志の応答を前提するか否かによって区別しなければならないからである。二つの恩恵を区別する重要な役割が人間の意志の応答にはある。もし人間の意志の応答という契機がなくなれば、二つの恩恵を区別する根拠がなくなってしまう。

それゆえ「呼びかけの恩恵」と「救いの恩恵」とを比べて、「両者は全く同じか」と問われるならば、「全く同じではなく、異なる」と答えなければならないし、「両者は全く異なるのか」と問われるならば、「全く異なるともいえない」と答えなければならない。かくて「呼びかけの恩恵」と「救いの恩恵」とは非常に歯切れの悪い微妙な関係にある。

このように考えてくるならば、アウグスティヌスにおいて「恩恵」という概念は一義的ではなく、多義的であることを認めなければならない。この恩恵の多義性を率直に認めないかぎり、アウグスティヌスのカリタス論は成立しない。⁴⁵⁾

ii) 神学の学問的性格

一般に学問は概念の多義性を廃し、概念の一義性を求める。もし概念が多義的であるならば、学

問は論理的な体系性を維持することができないからである。この意味で学問の論理的な体系性は概念の一義性によって支えられている。

前節(IV-i)でみたように、アウグスティヌスのカリタス論は恩恵という概念の多義性を認めることによって成立する。しかしこのような恩恵の多義性は論理的な体系性を神学から奪い、神学の学問性を著しく低下させることにもなると思われる。

上述(I-ii)したように、ニグレンのアガペ論は単純明快である。なぜならニグレンは恩恵という概念の多義性を廃し、その一義化を企てたからである。ニグレンによれば、神の恩恵はアガペに尽きる。すなわちアウグスティヌスが神の恩恵を「呼びかけの恩恵」と「救いの恩恵」との二つに区分したのに対し、ニグレンは人間の意志の応答という契機を排除することによって二つの恩恵を「アガペ」に一義化した。

たしかにニグレンが企てたように恩恵の概念を一義化することは神学が論理的な体系性を得て、神学の学問性を著しく向上させることになる。それゆえニグレンのアガペ論は神学の学問性という観点からみれば、恩恵の多義性を認めるアウグスティヌスのカリタス論よりも優れていると言わなければならない。

しかしニグレンのアガペ論は、その代償として人間の意志の応答という契機を神学から排除した。この功罪は注目に値する。たしかに人間を救う神の恩恵は万人に等しく注がれる無条件的なアガペの愛であるとしても、神に感謝するという人間の意志の応答を排除するならば、人間の救いは各人の意志的な努力とは全く無関係に実現することになってしまう。いいかえるならば、誰が救われて誰が救われないかは、人間の善し悪しに全く関係がなく、ただ神の意志(=神の御旨)によってのみ決められてしまうことになる。⁴⁶⁾

はたして本当にそうか。もしそうであるとすれば、「求めよ、そうすれば与えられる。探せ、そう

すれば見つかる。門をたたけ、そうすれば開かれる」⁴⁷⁾というイエス・キリストの言葉は不可解なものに留まるであろう。この聖書の箇所ではイエス・キリストは人間の努力を強く求めている。もし心の底から本当に救われたいと願うならば「求めよ」と。もし心の底から本当に天国の門を見つけたいと願うならば「探せ」と。もし心の底から本当に天国に入りたいと願うならば「門をたたけ」と。

たしかに神は人間にとって最高に価値ある存在者である。じっさい神は人間を無から造り、人間に救いと喜びを与え、人間を究極的な至福へと導く。人間を創造し、人間を摂理するのは、愛の源である全知全能の神である。だからこそ人間は心を尽くし、力を尽して神を愛し、敬虔な気持ちで神に感謝の祈りを捧げるのである。このように考えるならば、たしかに神に感謝するという人間の意志の応答は価値欲求的なエロスの愛である。

しかし罪に苦しむ人間が「どうか、私を助けてください。救ってください」と神に向って心の叫び(=祈り)をあげることは、非キリスト教的な愛として排除されるべきなのであるか。ニグレンのアガベ論は人間が神に感謝することによって、神と人間との間にペルソナ的な応答関係が生じることを全然考慮していない。この観点からみれば、恩恵の概念を一義化したニグレンのアガベ論は致命的な欠陥を抱えているといえるであろう。^{48) 49)}

かくて恩恵の概念を一義化することによって神学の学問性を高めることは、必ずしも聖書に即した真の神学を建設するとはかぎらない。ではキリスト教の愛はカリタスであると語るアウグスティヌスにとって、真の神学とは何を意味したであろうか。

アウグスティヌスにとって神学とは本質的に「告白」であった。信賞必罰なる神の前で自分の罪を懺悔し、罪を赦してくださる神の憐みに感謝しながら、万物の創造主である神に讃美の祈りを捧げる。懺悔の告白と感謝の告白と讃美の告白は、神の恩恵による賜物である。神の恩恵は順境のとき

も逆境のときも常に注がれ、自分の歩むべき道を照らす。いかに悪魔的な所業に転落しても人間には回心の可能性がある。たえざる回心のうちにカリタスは成り立つ。アウグスティヌスにとって「告白」こそは真の神学であった。⁵⁰⁾

結語：残された問題

以上において我々はエロスとアガペという二つの愛を手がかりに、アウグスティヌスが主張するカリタスとしての愛の意義について探究した。そこで結語に代えて、残された問題を今後の課題として簡単に指摘しておこう。

第一に、人間は神の呼びかけの内容をどのような方法で知るのであるか。——カリタスは神の呼びかけに人間の意志が応えるという仕方で成立する。ここまでは本論でみた。しかし問題はその先にある。神の呼びかけの内容は各人の年齢や体力・知力・才能などに応じて異なるが、神の呼びかけが何であれ、その内容を知ることができなければ、どんなに神の呼びかけに応えたくても応えられない。まさかアウグスティヌスは「耳を澄ませば神の声は聞こえますよ」と通常の人間では体験できないことを軽々しく主張するわけもなからう。かくて神の呼びかけの内容を人間が知る方法については、まだ明らかにされていない。

第二に、神から愛されている人間はどのような方法で隣人を愛したらよいのか。——カリタスは神から愛されている人間が神を愛するという仕方で成立する。ここまでは本論でみた。しかし問題はその先にある。カリタスが成立しているとき、神から愛されている人間は神を愛するだけでよく、隣人を愛する必要は全くないのか。もし隣人を愛する必要がないとすれば、アウグスティヌスは隣人愛を否定することになる。しかしカトリック教会の司教として愛の奉仕に励んできたアウグスティヌスが隣人愛を軽々しく否定するわけもなからう。かくて人間が隣人を愛する方法については、

まだ明らかにされていない。

上述した二つの問題は前者が内省性に関する問題であり、後者が隣人愛に関する問題である。いずれもアウグスティヌスの思想を理解する上で極めて重要な問題である。——特に後者の問題について考えることは医療事業や慈善事業・教育事業などに積極的に関与してきたキリスト教の立場を根拠づけることにもなるであろう。この問題を解決するための糸口はイエス・キリストが語った「善きサマリア人の例え話」⁵¹⁾に求められる。この例え話で描かれているサマリア人の行動を検討することは、隣人愛という名のもとでキリスト教が実践してきた愛の奉仕の意味を深く理解する端緒となるであろう。⁵²⁾

註

- 1) 本稿は「2016年度天使大学・北海道薬科大学 連携公開講座」において「キリスト教の愛とは何か—カリタスとしての愛—」と題して筆者が行った講演会の配布資料に加筆修正を施した短報である（筆者の講演日は2016年8月18日）。このたび『天使大学紀要』18巻2号に載せるにあたり、「アウグスティヌスにおけるカリタスとしての愛の意義」と題名を改めて主題を明確化した。天使大学は「愛をとおして真理へ」(per Caritatem ad Veritatem)を建学の精神にしている。本稿はアウグスティヌスに即しながら、建学の精神に掲げられているカリタス(caritas)としての愛の意義を為しうるかぎり明らかにすることを目的とする。
- 2) Liddell & Scott, Greek-English Lexicon, Oxford, 1968, p. 695.
- 3) Ibid. p. 6
- 4) Lewis & Short, A Latin Dictionary, Oxford, 1991, p. 292.
- 5) ギリシア語で「愛」を意味する言葉は「エロス」「アガペ」のほかに「フィリア」(φιλία)がある。またラテン語で「愛」を意味する言葉は「カリタス」のほかに「アモル」(amor)「ディレクティオ」(dilectio)がある。本稿では「エロス」「アガペ」「カリタス」のみを考察の対象とする。なお「フィリア」はLiddell & Scott, op. cit. p. 1934. を参照。また「アモル」はLewis & Short, op. cit. p. 108. 「ディレクティオ」はIbid., p. 579. を参照。
- 6) ラテン語の名詞カリタス(caritas)は形容詞カルス(carus)に由来する。形容詞カルスは「高価な、貴重な」という意味を持つので、一般に「愛」と訳される名詞カリタスは「高価、貴重」という意味合いを含む。なおラテン語の名詞カリタスは「博愛、寛容、慈善、慈善事業」などを意味する英語の名詞チャリティー(charity)の語源である。
- 7) 元来ラテン語の「カリタス」(caritas)は新約聖書におけるキリスト教的な愛の概念を示すギリシア語「アガペ」(ἀγάπη)に対応するラテン語であり、①神が人間を愛する場合の愛だけでなく、②人間が神を愛する場合の愛、③人間が人間を愛する場合の愛をも意味する。しかしプロテスタント神学者ニグレンは、①の「アガペ」のみをキリスト教の愛として認め、②の「アガペ」と③の「アガペ」をキリスト教の愛から排除する。ニグレンによれば、キリスト教の愛は「神が人間を愛する場合の愛」としての「アガペ」だけである。この点について、桑原直己：トマス・アキナスにおけるカリタス理論のキリスト教的意味について、筑波大学編, 33号, 31~33頁, 2008年. を参照。——本稿はニグレンのアガペ論を批判することによってカリタスの意味を考察する。それゆえ元来「アガペ」は上記の①の「アガペ」だけでなく、②の「アガペ」と③の「アガペ」をも含むが、本稿で「アガペ」と語る場合はニグレンが主張した「神が人間

を愛する場合の愛」としての「アガペ」のみに限定する。

- 8) 本稿はニグレンのアガペ論を巡る議論を展開する(註7)。ニグレンのアガペ論を巡る議論は既に過去の議論ともいえるが、現在この議論を敢えて取り上げる意義について簡単に述べておこう。——西洋ではルネサンス期以降、全ての価値基準を人間に置く人間中心主義が台頭し、その影響を受けてキリスト教神学も人間中心主義的な傾向を帯びたと思われる(自由主義神学や歴史神学など)。このような背景のもとで、ニグレンはキリスト教神学から人間中心主義を一掃し、全ての価値基準を神に置く神中心主義のキリスト教神学を樹立しようとした。ただし神中心主義のキリスト教神学を樹立するとき、ニグレンは人間中心主義的な傾向を持つと判断した全ての思想を非キリスト教的な思想として否定した。しかし彼が否定した思想は本当に非キリスト教的だったのか。もしかすると、キリスト教にとって本質的に重要な思想だったかもしれない。それゆえ彼が否定した思想に焦点を当てて、その思想が非キリスト教的な思想であるか否かを探究することは真のキリスト教神学を建設する上で不可欠な作業であるとともに、キリスト教の本質を解明する端緒ともなるであろう。この意味でニグレンのアガペ論を巡って議論することは現在においても意義がある。なおニグレンが当時のキリスト教神学に見出される人間中心主義的な思想を否定したことについて、山田晶：アガペとエロス，社会と倫理，13号，230～231頁，南山大学社会倫理研究所，2002年も参照。
- 9) エロスの愛はプラトンの次の著作を参照した。プラトン：饗宴，森進一訳，新潮社，1968年。原典はBurnet, J. (ed). *Platonis opera*, 5 vols., Oxford. 1899-1906。
- 10) アガペの愛はニグレンの次の著作を参照した。

- ニグレン：アガペーとエロース，岸千年・大内弘助訳，新教出版社，I巻1954年，II巻1955年，III巻1963年。原著Anders Nygren, *Den kristna kärlekstanken genom tiderna: Eros och Agape*, first published in Swedish 1930-1936。英訳 Anders Nygren, *Agape and eros*, first published in Great Britain 1953。
- 11) ニグレン、上掲書(第I巻)はNygrenを「ニグレン」、Agapeを「アガペー」、Erosを「エロス」と訳しているが、本稿では簡潔にNygrenを「ニグレン」、Agapeを「アガペ」、Erosを「エロス」と訳した。
- 12) プラトン、上掲書70～77頁。プラトンの『饗宴』はエロスの愛を主題とする対話篇である。この著作の中でプラトンは、まず五人の演説者を登場させてエロス讃美を行い、次にソクラテスを登場させてエロス批判を行う。このエロス批判においてエロスの持つ価値欲求的な特徴が明らかとなる(199c～201c)。エロスの価値欲求的な特徴をニグレンも指摘している。ニグレン、上掲書(第I巻)147～155頁を参照。
- 13) プラトン、上掲書27～38頁。プラトンは『饗宴』の中でソクラテスに先立って五人の演説者を登場させる。この五人のうち二番目に演説したパウサニアスのエロス讃美において二つのエロスの相違が明らかとなる(180c～185c)。二つのエロスの相違をニグレンも指摘している。ニグレン、上掲書(第I巻)142～147頁。
- 14) ニグレン、上掲書(第I巻)135～142頁。
- 15) ニグレン、上掲書(第I巻)46～48頁。ニグレンはアガペを神の愛であると規定し、その特徴を四つあげる。第一にアガペは自発的で誘発されない。第二にアガペは人の功績に関わりがない。第三にアガペは創造的である。第四にアガペは神との交わりの道を開く。この四つの特徴のうち、ニグレンは第三の特徴

がアガペの中心的決定的な点であるといっている。

- 16) マタイによる福音書, 5章45節.
- 17) ニーグレン、上掲書(第I巻)45~46頁。ニーグレンによれば、エロスは価値欲求的な愛である。それゆえエロスは善い対象を愛し、悪い対象を愛さない。この意味でエロスは対象が善い場合においてのみ成り立つ条件付きの愛である。これに対し、アガペは価値創造的な愛である。それゆえ対象を愛することによって対象のうちに新たな価値を産み出すアガペは対象の善悪とは全く無関係に善い対象も悪い対象も平等に愛する。この意味でアガペは対象が善い場合も悪い場合も成り立つ無条件の愛である。このようにエロスとアガペを比較すると、二つの愛は全く相容れない愛であることが理解できる。
- 18) ニーグレン、上掲書(第III巻)3~130頁。
- 19) ハルナック：教義史綱要, 山田保雄訳, 1~5頁, 神戸キリスト教書店, 1997年。また山田晶「アガペとエロス」上掲書217~218頁も参照。
- 20) ハルナック、上掲書306~311頁。また山田晶「アガペとエロス」上掲書217~218頁も参照。
- 21) ニーグレンはハルナックの歴史観を継承した。この点について、山田晶「アガペとエロス」上掲書217~218頁を参照。しかしニーグレンはアガペ論の立場からハルナックの思想を厳しく批判する。ニーグレンのハルナック批判は、ニーグレン、上掲書(第I巻)46~48頁を参照。また山田晶「アガペとエロス」上掲書222~224頁も参照。
- 22) ニーグレン、上掲書(第I巻)5~10頁。
- 23) 同書20~24頁。
- 24) 同書20~24頁。
- 25) 同書24~27頁。
- 26) 西洋中世世界のキリスト教は基本的にはアウグスティヌスによって形成された神学的枠組

みの影響下にあった。この意味でトマス・アクィナスのカリタス論も基本的にはアウグスティヌス的な意味におけるカリタス概念を継承している。以上の点について、桑原直己、上掲書31~32頁を参照。本章(III)はアウグスティヌスのカリタス概念だけでなく、トマス・アクィナスのカリタス概念をも視野に入れて考察を進める。

- 27) 新約聖書のアガペとアウグスティヌスのカリタス研究として、金子晴勇：アガペーとカリタス, 愛の思想史—愛の類型と秩序の思想史, 39~53頁, 知泉書館, 2003年を参照。また歴史的意識をアガペという聖書的概念によって探究した独創的な研究として、大林浩：アガペーと歴史的な精神, 日本基督教団出版局, 1981年。更にアガペの原意に立って新約聖書研究を行った独創的なアガペ研究として、遠藤徹：〈尊びの愛〉としてのアガペー, 教文館, 2015年も参照。
- 28) アウグスティヌス：告白, 2巻2章2節。翻訳は山田晶訳編：世界の名著14 アウグスティヌス, 91頁, 中央公論社, 1968年による。
- 29) アウグスティヌスは『三位一体論』において、神が三位一体(trinitas)であることを信じた上で、神の像(imago Dei)として造られた人間のうちに神の三位一体の像を探し求める。そのさいアウグスティヌスは聖書の權威に従って神をカリタスとして設定し、人間のうちにある神の三位一体の像が見出される場として人間のカリタスをあげる。じっさい彼は『三位一体論』8巻8章12節において「〈私は愛を見る。そして全力を尽くして精神によってそれを凝視する。私はまた『神は愛(caritas)であり、愛の中に留まる人は神の中に留まる』(Iヨハ4,16)と聖書が語るのを信じる。しかし私はそれを見るとき、その中に三位一体を見るのではない〉と〔言う人がいる〕。そんなことはない。君は愛(caritas)を見るなら

- ば、君は三位一体を見る」といっている。このようにアウグスティヌスの三位一体論においてカリタスは重要な役割を演じている。一々なおアウグスティヌスの三位一体論について、高橋亘：アウグスチヌス『三位一体論』における imago Dei, アウグスチヌスと第13世紀の思想, 33～83頁, 1980年を参照。また谷隆一郎：アウグスティヌスの哲学—「神の似姿」の探究—, 創文社, 1994年も参照。
- 30) アウグスティヌスは「カリタス」(caritas)、「ディレクティオ」(dilectio)、「アモル」(amor)を概ね同じ意味で用いている。たとえば『神の国』14巻7章1節において「人が神を愛し、かつ隣人を一人間に従ってではなく神に従って—自分自身のように愛することを決心した場合、その人は疑いもなくその愛のゆえ善い意志の人と呼ばれる。その愛は聖書ではふつう『カリタス』と呼ばれるが、同じ聖書の中で『アモル』とも言われている」といっている。また『三位一体論』8巻10章14節において「聖書がこれほど称賛し宣べ伝える『ディレクティオ』や『カリタス』が善への『アモル』でないとすれば、いったい何であろうか」といっている。なおアウグスティヌスが「カリタス」「ディレクティオ」「アモル」を概ね同じ意味で用いている点について、山崎裕子：アンセルムスによるカリタスの理解—アウグスティヌスとの比較考察—, 紀要, 12巻2号, 51～59頁, 文教大学国際学部, 2002年を参照。
- 31) 次節Ⅲ-iiを参照。
- 32) アウグスティヌスは『告白』8巻12章28節において、回心の体験を告白している。なお回心は「罪の懺悔」を契機にして起る。罪の懺悔と神への讃美の関係について、山田晶：懺悔と讃美—告白するとはいかなることか—, アウグスティヌスの根本問題, 3～27頁, 創文社, 1977年を参照。
- 33) 罪を赦して人間の価値を再創造する神のアガペは人間の意志が回心し、神と人間との間にペルソナ的な応答関係が成立することによって効力を発揮する。この点について、山田晶「アガペとエロス」上掲書233～235頁を参照。
- 34) アウグスティヌスの恩恵論を主題とする研究として、金子晴勇：アウグスティヌスの恩恵論, 知泉書館, 2006年. を参照。またアウグスティヌスの初期の著作に焦点を当てた恩恵論の研究として、宮谷宣史：初期の恩恵論, アウグスティヌスの神学, 教文館, 147～172頁, 2005年も参照。
- 35) 山田晶訳編、上掲書38～40頁。
- 36) 同書38～40頁。
- 37) 悪い行為を重ねると、悪い習慣としての悪徳が形成されるという考え方はトマス・アクィナスが詳論している。トマス・アクィナス『神学大全』2部の1、71問題を参照。
- 38) 善い行為を重ねると、善い習慣としての美德が形成されるという考え方はトマス・アクィナスが詳論している。トマス・アクィナス『神学大全』2部の1、55問題を参照。なおアウグスティヌスは美德としてのカリタスを論じていない。この点について、桑原直己、上掲書32～34頁を参照。なおアウグスティヌスのカリタス概念とトマス・アクィナスのカリタス概念との相違点については今後の課題にしたい。
- 39) アウグスティヌスは『神の国』10巻5章において「目に映る犠牲とは『サクラメント』、すなわち目には見えない犠牲の聖なる徴なのである」といっている。この秘跡の定義をトマス・アクィナスも継承している。トマス・アクィナス『神学大全』3部60問題を参照。
- 40) ケナン・B・オズボーン：秘跡神学総論, 太田実訳 石脇慶總監修, 107～133頁, 新世社, 2006年。
- 41) 同書134～155頁。

- 42) 同書 156～184 頁。個別的な秘跡が七つという数に達したのはロンバルドゥス(1100～1160)の時代になってからである。それゆえ七つの秘跡がカトリック教会の最初からの教えであったということとはできない。
- 43) 同書同頁。秘跡の効果については二つの対立する考え方がある。一つは「人効論」である。この考え方によれば、秘跡の効果は秘跡の執行者の人柄に依存する。もう一つは「事効論」である。この考え方によれば、秘跡の効果は秘跡の執行者の人柄に依存しない。カトリック教会は人効論を *ex opere operantis*、事効論を *ex opere operato* と表現する。アウグスティヌスはドナティスト論争を通して後者の考え方を確立した。この点について、山田晶 訳編、上掲書 35～38 頁を参照。
- 44) ニグレンを批判した古典的な研究として、M. C. ダーシー：愛のロゴスとパトス、井筒俊彦・三邊文子訳、上智大学出版部、1966 年。原著 Martin D' Arcy, *The Mind and Heart of Love*, 1947. を参照。ニグレン以後のアガペ研究を総括し、倫理的次元におけるアガペの意義を批判的に分析した研究として、G. アウトカ：アガペー 愛についての倫理学的研究、茂泉昭男・佐々木勝彦・佐藤司郎訳、教文館、1999 年。原著 Gene Outka, *Agape: An Ethical Analysis*, 1972、を参照。ニグレンのアガペ論を批判することによってアウグスティヌスの愛の思想を明らかにした研究として、たとえば須藤英幸：アウグスティヌス『ヨハネの第一の手紙講解』における兄弟愛—ニグレンのカリタス理解を超える愛のダイナミズム—、中世思想研究、中世哲学会編、59 号、1～16 頁、2017 年を参照。
- 45) 新約聖書において愛を意味するギリシア語「アガペ」は神が人間を愛する場合の愛だけでなく、人間が神を愛する場合の愛や人間が人間を愛する場合の愛をも含む(註 7)。それゆえ元来アガペは多義的であった。このアガペがラテン語で「カリタス」と訳されたとき、カリタスはアガペの多義性を継承した。このように考えるならば、アウグスティヌスにおける恩恵概念の多義性は新約聖書におけるアガペの多義性に基づくといえるであろう。
- 46) 山田晶「アガペとエロス」上掲書 230～235 頁を参照。
- 47) マタイによる福音書、7 章 7 節。
- 48) 山田晶「アガペとエロス」上掲書 230～235 頁を参照。
- 49) 本稿は神と人間との間に成立するペルソナ的な応答関係が考慮されていないという観点からニグレン批判を行った。しかしもし本格的にニグレン批判を行うのであれば、彼の方法論(モチーフ研究)から分析する必要があると思われる。ニグレンの方法論を分析することによってニグレン批判を展開することは今後の課題としたい。
- 50) 山田晶訳編、上掲書 18 頁を参照。
- 51) ルカによる福音書、10 章 25～37 節。
- 52) 本稿はアウグスティヌス的な意味でのカリタスがアガペの「完成」であるということを中心的な論点にしている。この論点に対し、二つの疑問が予想される。一つはカリタスがアガペの完成であるというとき、アガペの完成という表現は適切なのか。もう一つはカリタスがアガペの完成であるというとき、エロスの位置づけはどうなるのか。以下、この二つの疑問に対する答えをアウグスティヌスの立場から考えてみよう。
- 第一の疑問に対する解答。——ニグレンによれば、神はアガペによって罪人を赦し、その結果、神と人間とが和解する。これがアガペの第四の特徴「アガペは神との交わりの道を開く」(*Agape is the initiator of fellowship with God*) である(註 15)。たしかにニグレンが主張するように、罪人は神の

アガペによって赦しを得る。しかし単にそれだけで神と人間とが和解したといえるのか。本来、和解とは一方が他方を一方的に「赦す」ことによって成立するのではなく、赦された者が赦しを得て「感謝する」ことによって成立する。それゆえ神と人間とが和解するために、人間は神から赦しを得るだけでなく、赦してくれた神に感謝しなければならない。かくて神から赦しを得た人間が神に感謝することは、神と人間とが和解するために必要不可欠な契機として理解することができる。ところで本論(Ⅲ-i)でみたように、アウグスティヌス的な意味でのカリタスは神が人間を愛し、その愛に応じて人間が神を愛するときに成立する。このようなカリタスは罪人を赦す神のアガペを前提し、神から赦しを得た人間が神に感謝することによって神と人間とを和解へと導く。すなわち神と人間との間で成立するカリタスは人間が神に感謝することを契機として、アガペの第四の特徴である神と人間との和解を実現する。この意味でカリタスはアガペの完成である。

第二の疑問に対する解答。——もし神と人間との和解を実現するカリタスがアガペの完成であるとすれば、神から赦しを得た人間が神に感謝するという契機はアガペの完成に深く関与していることになる。ところで本論(Ⅲ-ii)でみたように、神に感謝するという人間の意志の応答は単に赦しを与えてくれた神に対する感謝だけでなく、究極的な至福を与える神に対する祈願でもある。この意味で神に感謝する人間の意志の応答は価値欲求的なエロスである。このような価値欲求的なエロスは罪人を赦す神のアガペを前提し、神と人間との間にカリタスという愛の交流を形成する契機となる。それゆえ神から赦しを得た人間の価値欲求的なエロスは神のアガペに対する人間の意志の応答であるとともに、罪

人を赦す神のアガペを神と人間との和解を実現するカリタスへと高める契機として理解することができる。かくてアウグスティヌス的な意味でのカリタスがアガペの完成であるというとき、エロスはニグレン的な意味でのアガペの完成に深く関与している。

なおニグレンが主張したアガペの第四の特徴について、山田晶「アガペとエロス」上掲書 225～230 頁を参照。また神と人間との間で成立する和解の意味について、山田晶「アガペとエロス」上掲書 230～235 頁を参照。

[追記] 本稿の註は「天使大学紀要執筆要領」の文献表記法に準拠している。それゆえ哲学や神学などの論文で用いる通常 of 文献表記法に本稿の註が準拠していない点については、何卒ご寛容のほどお願い申し上げます。なお本稿の英文題目と英文要旨を執筆するにあたり、本学の「キリスト教学概論」担当教員ケン・スレイマン准教授から貴重な助言を賜った。厚く御礼申し上げます。